

< 翻 訳 >

## 叙事詩の宗教哲学

—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究XXXVII) <sup>1</sup>—

茂木 秀 淳 元信州大学教育学部

キーワード：創造，帰滅，グナ，ブラクリティ，ヨーガ，死の前兆

[299 章]<sup>2</sup>(B.311 章, C.11569-11589, K.316 章)

ヤージュナヴァルキヤ仙は言った。

- (1) すぐれた人よ，未顕現の<sup>3</sup>時間の数量 (kālasamkhyā) を私から聞くべし。五千劫二回 (pañca kalpasahasrāni dviguṇāni) が未顕現の昼と言われる。(Cf.Hopkins[1903]: the day of the Unmanifest, p.44.3)
- (2) 同じ長さが(その)夜である。それが目覚めた時，人々の王よ，それは最初にあらゆる生き物たちの (sarvadehinām) 命の糧 (jīvana) として植物を創造した。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Unmanifest, a person who first creates plants, p.187.8)
- (3) それからブラフマー神を創造した。(ブラフマー神は) 金の卵より生じた。それはあらゆる生き物たちの身体 (mūrti) である，とこのように我々は聞いた。(Cf.Chāndogya Upa.3.19.1; Haas[1922]: the cosmic egg, p.14, No.173)

<sup>1</sup>本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXXVI)—』(信州大学教育学部研究紀論集第 8 号 pp.215-234 に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本号で用いる主なものは下記のとおりである。

- Hopkins[1901]: E.W. Hopkins, Yoga-technique in the Great Epic, JAOS. vol.22, pp.333-379, 1901.
- Hopkins[Great Epic]: E.W. Hopkins, The Great Epic of India, Its Character and Origin, 1901, Reprint Calcutta 1978.
- Hopkins[1902]: E.W. Hopkins, Remarks on the Form of Numbers, the Method of Using them, and the Numerical Categories found in the Mahābhārata, JAOS vol.23, pp.109-155, 1902.
- Hopkins[1903]: E.W.Hopkins, Epic Chronology, JAOS. vol.24, pp.7-56, 1903.
- Haas[1922]: George C.O.Haas, Recurrent and Parallel Passages in the Principal Upanishads and the Bhagavad-Gītā, JAOS, vol.42, pp.1-43, 1922.
- Frauwallner[1925]: E. Frauwallner, *Untersuchungen zum Mokṣadharmā. Die nicht-sāṃkhyistischen Texte*, JAOS 45, pp.51-67, 1925. (Kleine Schriften, pp.38-54)
- Johnston[1937]: E.H.Johnston, Early Sāṃkhya, London, 1937.
- Gonda[1954]: J.Gonda, Aspects of early Viṣṇuism, Utrecht 1954, 2nd edition, Delhi-Varanasi-Patna, 1969.
- Edgerton[1965]: F.Edgerton, The Beginnings of Indian Philosophy, London, 1965.
- 中村 [2000]: 中村了昭「マハーバーラタの哲学 解脱法品原典解明」(下) 平楽寺書店 2000.
- Oberlies[Grammar]: Thomas Oberlies, Grammar of Epic Sanskrit, (Indian Philology and South Asian Studies 5) Berlin 2003.

<sup>2</sup>Hopkins[Great Epic] は，この章から始まる約 200 の 2 詩節 (hemistichs) を対象に pathyā の最初の pāda(a 句) の 5 類型の使用頻度を検討している (p.219.22ff)。また，この章から始まる 1000 詩節を対象にして，vipulā の 4 類型の使用頻度を，Bhagavad Gītā と比較しつつ検討している。(p.231ff.)

<sup>3</sup>avyaktasya Cs. avyaktaśabdena avidyopahitaṃ jagatkāraṇaṃ brahmocyate / (avyakta の語によって，無知と結びついた世界原因であるブラフマンが言われている)

- (4) 一年間卵の中に住んだ後、造物主たる偉大な尊者は<sup>4</sup>卵から出て、(卵の) 半分を全大地、半分を天として接ぎ合せた<sup>5</sup>。(Cf.Manu Smṛti 1.13)
- (5) これは、天と地の(創造)として(dyāvapṛthivyor ity eṣa)、もろもろのヴェーダに書かれている(vedeṣu paṭhyate)、偉大な王よ。威力ある者(ブラフマー神)は、この二つの部分の中間に虚空を創造した。(Cf.Hopkins[Great Epic]: citation of a Vedic phrase, p.25.6)
- (6) この(ブラフマー神)についても、ヴェーダとヴェーダ支分に専心する人々によって算定されている。一万劫(kalpa)より四分の一少ないのが(ブラフマー神の)昼と言われる。内我を考察する人々(adhyātmacintakāḥ)は、この夜も同じ長さである、と言った。
- (7) 聖仙(ブラフマー神)は、神的な存在である(bhūtaṃ divyātmakam)自我意識を創造した<sup>6</sup>。そしてさらにこの偉大な聖仙は、この上なき四人の<sup>7</sup>息子たちを、(元素からなる)身体(の創造)より前に<sup>8</sup>(創造した)。彼らは、父祖たちからの父祖<sup>9</sup>、と伝えられている、最高の王よ。
- (8) すぐれた人よ、神々は父祖たちの息子たちであり<sup>10</sup>、神々によって<sup>11</sup>動くもの動かぬものからなる世界は包まれている、とこのように我々は聞いた。
- (9) 最高位にある自我意識は、地・風・虚空・水、そして五番目として火というように、五種の元素を創造した。(Cf.Haas[1922]: earth, water, fire, air, ether, p.30, No.528)
- (10) この第三(の創造)を行なう者(自我意識)にとっても、五千劫(pañca kalpasahasrāni)が夜であると人々は言った。昼も同じ長さであると言われる。

(11) 音声・触感・色・味、そして五番目として香<sup>12</sup>、これらは五種の大元素における特

<sup>4</sup>mahāmuniḥ Cn. mahān / ((mahāmuni とは)「大」のことである)

<sup>5</sup>P.K.: saṃdadhe 'rdhaṃ mahīṃ kṛtsnāṃ divam ardhāṃ B. saṃdadhe sa mahīṃ kṛtsnāṃ divam ūrdhvam Ca. divam ūrdhvam iti vacanād aṇḍam bhittvā ūrdhvārdhena pṛthivīm sasarjeti manvādimataṃ (Manu Smṛti 1.9-13) sūcitam / (divam ūrdhvam という言葉によって、卵を破って、上半分によって大地を創造した、というように、マヌなどの考えが示されている)

<sup>6</sup>srjati ahaṃkāraṃ ṛṣir Ca. srjaty ahaṃkāraṃ iti, sa brahmākhyo mahān ahaṃkāraṃ parameṣṭyākhyam srjati / (srjaty ahaṃkāraṃ とは、かのブラフマンと呼ばれる「大」が、最高者と呼ばれる自我意識を創造した、という意味である)

<sup>7</sup>caturaś ca Cs. caturaḥ, catuṣsaṃkhyākān, sarvakriyāsu dakṣān / (caturaḥとは、四という数を、すなわち、あらゆる行為に能力のある者たちを、という意味である)

<sup>8</sup>dehāt pūrvaṃ mahān ṛṣiḥ Cn. dehāt bhautikadehotpatteḥ pūrvaṃ caturo bhautikān, vyaṣṭīmanobuddhy-ahaṃkāracittākhyān putrān mahān ṛṣir asrjati / (dehāt, すなわち、元素からなる身体の発生より、pūrvaṃ, 以前に、四人の、元素からなる、個々にマナス・ブッディ・アハーカーラ・チッタと呼ばれる息子たちを、mahān ṛṣi 偉大な聖仙は、創造した、という意味である)

<sup>9</sup>P.K.: pitṛbhyaḥ pitarāḥ B. pitṛnām pitarāḥ

<sup>10</sup>devāḥ pitṛnām ca sutā Cn. devāḥ indriyāṇi, antaḥkaraṇacatuṣṭayasahitāḥ, pitṛnām, mahābhūtānām sutāḥ / (devāḥとは、四種の内的器官を伴った、もろもろの感官である。それらは、pitṛnām, すなわち、もろもろの大元素の、sutāḥ 息子たちである)

<sup>11</sup>devair Cn. devair bhūtaiḥ, lokāś caturdaśabhuvanāni / (devair, すなわち、もろもろの元素によって、lokāḥ, すなわち、十四種類の世界は(包まれている)、という意味である)

<sup>12</sup>P.K.: gandhaś ca pañcamāḥ B. gandhas tathaiva ca

- 性 (viśeṣa) である, 王の中のインドラよ。それらによって, もろもろの元素は日々満たされるのである, 王よ。(Sandhi irregular: *bhūtāni ahany* (Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.3. Absence of *kṣaipra-sandhi*, 1.1.3.1. *-i/ī a/ā-*, p.14.2)) (Cf.MBh.XII.298.14; Hopkins[Great Epic]: repetition of the first half stanza of 298.14, p.187, fn.2)
- (12) これら (特性) は, 互いを羨み, 互いの幸福を喜ぶ。そして, 互いを願い<sup>13</sup>, 互いに競うのである。(Sandhi irregular: *ete anyonyasya* (a-b 句), *abhimanyante anyonya-* (c-d 句) (Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.5. Absence of *abhinihita-sandhi*, 1.1.5.1. *-e ā-*, p.16.2))
- (13) これら (五元素) は, (特性の) 破壊的なもろもろの性質によって<sup>14</sup>互いに打ち倒されつつも<sup>15</sup>, 変わることはない<sup>16</sup>。そして, 動物の母胎に入って, この世界で動きまわるのである (parivartante)。
- (14) 三千劫がこれらの昼と<sup>17</sup>言われる。夜も同じ長さである。心 (manas) も (同じ長さである), 人々の王よ。(Sandhi irregular: *kalpasahasrāṇi eteṣām*<sup>18</sup>)
- (15) 心 (manas) は, 感官たちによって行われたことすべてに<sup>19</sup>動くのである, 王の中のインドラよ。感官たちが見るのではなく, 心こそがそこで見るのである<sup>20</sup>。
- (16) 目は, もろもろの色を心によって見る。目によってではない。心が動揺すると, 目は見ていても見ないのである。すべての感官たちは, 同じように知覚している (paśyanti), と人々は考える。
- (17) 心が停止すると, 王よ, 感官も停止するであろう。そして感官が停止しても<sup>21</sup>, 心には停止は生じないであろう。このように感官たちは, 心を主とする (manaḥpradhānāni) と理解すべし。(Sandhi irregular: *manaḥpradhānāni indriyāni* (Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.1. Absence of *savarṇa-sandhi*, 1.1.1.2. *-i/ī ī-*, p.6.8))
- (18) 心はあらゆる感官たちの支配者 (īśvara) であると言われる。このように, あらゆる元素 (bhūtāni) はここ (心) に入るのである (viśanti), 誉高き者よ。

[300 章] (B.312 章, C.11590-11606, K.317 章)

<sup>13</sup>P. abhimanyante B.,K.: ativartante

<sup>14</sup>guṇair hāribhir Cn. hāribhiḥ, haraṇaśīlaiḥ rūpādibhiḥ / (hāribhiḥとは, 除去する性質をもつ色などによって, という意味である)

<sup>15</sup>P. vadhyaṃānā anyonyam B.,K.: vadhyaṃānā hy anyonyam (hi as a hiatus breaker)

<sup>16</sup>P.,K.: avyayāḥ B. avyayaiḥ B. の読みでは, 不変 avyaya なのは, guṇa ということになる。

<sup>17</sup>eteṣām ahar Cn. eteṣām, viśeṣopāsakānām / (eteṣām とは, 特性を従者とするものたちの, という意味である)

<sup>18</sup>Oberlies[Grammar]: 1.1.3. Absence of *kṣaipra-sandhi*, p.14 に当たると思われるが, *-i e-*のケースを挙げていない。Cf.MBh.XII.306.75.

<sup>19</sup>P.,K.: caritam sarvam indriyaiḥ B. vāritam sarvam indriyaiḥ

<sup>20</sup>P.,K.: mana evātra paśyati B. mana evānupaśyati P.,K. の *atra* は, 「感官と同じ場所で」の意味か。

<sup>21</sup>P.,K.: na cendriyavyuparame B. tadindriyeṣūparamo

ヤージュナヴァルキヤ仙は言った。

- (1) もろもろの原理の創造の数量<sup>22</sup>，そして時間の数量とを，私は順序に従って述べた。  
 帰滅 (saṃhāra) についても私の言うことを聞くべし。
- (2) 無始無終にして永遠不滅のブラフマー神は，どのようにして何度も生き物たちを創造して，滅するのか (を聞くべし)。
- (3) 昼が終わったのを知って，夜に眠ろうとした (svapnāmanās) 未顕現の至尊者は，「私」によって作られた人を (帰滅へと) 駆り立てた<sup>23</sup>。
- (4) すると未顕現によって駆り立てられた一万の光線をもつ太陽は，自らを，燃えている火のごとき十二個にして，(cf.Hopkins[1903]: twelve suns, p.41.15)
- (5) 胎生，卵生，汗生，そして芽生の四種の生き物の群れを<sup>24</sup>，瞬時に熱で焼き尽くすのである，人々の王よ。(Haas[1922]: udbhijjaṃ, p.20, No.298)
- (6) かくして瞬きする間に<sup>25</sup>動くもの動かぬものは (sthāṇujaṅgamam) 消滅する。そして大地はすべて亀の甲のようになるのである。
- (7) 量り知れぬ力をもつ者は，世界を完全に焼き尽くした後，それからすぐに勢いある水で世界をすべて満たした<sup>26</sup>。
- (8) それから，その水は，時の火 (kālagṇi) に近づいて，消滅に至る。水が消滅すると，威力ある王よ，巨大な火が燃え上がる。
- (9) その火を，すなわち，七種の炎をもち，あらゆる存在物を手ひどく焼き，力強く燃える火を，量りがたく，
- (10) 八種の性質をもつ力強い風が<sup>27</sup> 呑みこんだ。限りない活力をもって (amitaprāṇas)，横，上，下方に吹きまわりつつ。

<sup>22</sup>P.,K.: sargasamkhyā B. sarvasamkhyā

<sup>23</sup>codayāmāsa bhagavān avyakto 'haṃkṛtaṃ naram Ca. ahaṃkṛtaṃ naraṃ, ahaṃsvarūpaṃ parameṣṭitvam ādityasya vyañjayati / (ahaṃkṛtaṃ naram とは，「私」の本性を，すなわち，太陽の最高位性を，示している) Cn. ahaṃkṛtaṃ naraṃ, ahaṃkārabhimānaṃ mahārudraṃ / (ahaṃkṛtaṃ naram とは，自我意識によって自惚れる大ルドラを，という意味である) Cp. ahaṃkṛtaṃ ahaṃkāratmakam naraṃ pumāṃsaṃ rudraṃ ity arthaḥ / (ahaṃkṛtaṃ とは，自我意識を本性とする，naram, すなわち，男を，すなわち，ルドラを，という意味である) Cs. avyakto 'haṃkṛtaṃ naram iti avidyopādhir īśvaro 'ntaryāmiṇaṃ ahaṃkārapradhānaṃ naram / (avyakto 'haṃkṛtaṃ naram とは，無知に限定された自在者は，内制者を，すなわち，自我意識を主とする，naram 男を，という意味である)

<sup>24</sup>P. prajājālaṃ B. mahīpāla K. prajājātaṃ

<sup>25</sup>unmeṣamātreṇa Cs. unmeṣamātreṇa, yugapadudayaṃtreṇa / (unmeṣamātreṇa とは，同時発生の間に，という意味である) Cf.Hopkins[1903]: exchange of *nimeṣa* with *unmeṣamātreṇa*, p.10.25.

<sup>26</sup>P. āpūryata samantataḥ B.,K.: āpūryati sarvaśaḥ B.,K. は，samantataḥが第六詩節でも使われているので，重複を避けたか。

<sup>27</sup>P. balavān vāyur aṣṭātmako B.,K.: bhagavān vāyur aṣṭātmako Ca. vāyor aṣṭātmakatvaṃ, tiryakpāta-pavitratva-mehana-nodana-bala-vīryocchrāyatā-sāighraguṇatayā prāgdarśitaṃ / (vāyor aṣṭātmakatvaṃ は，水平に吹くこと，浄化性，排尿 (?), 打撃，剛力，力強さと上昇性，高速性として，かつて示された) Cp. aṣṭātmakaḥ, aṣṭasu dikṣu ātmā śarīraṃ yasya / yadvā, tiryakpātaḥ pavitratvaṃ nodanaṃ balam eva ca / vīryam cchrāyatā sthairyam vegaś cāṣṭaguṇo marut / (aṣṭātmakatvaḥ とは，その ātman, すなわち身体が，八種の方位にあるものである。あるいは，水平に吹くこと，浄化性，打撃，剛力，力強さ，上昇性，持続性，勢力が，八種の性質をもつ風神である)

- (11) 対抗勢力のない恐ろしいその風を、虚空が自ら (ātmanā) 呑みこむ。そして大声で叫ぶ虚空を、動きまわる<sup>28</sup>心 (manas) が呑みこむ。
- (12) 心を一切のアートマンが<sup>29</sup>呑みこむ。それは、自我意識であり、造物主である。自我意識を<sup>30</sup>過去・現在・未来を知る大きなアートマンが (呑みこむ)。(Cf.Frauwallner[1925]: die sāmkyhistische Dreiheit des Innerorgans, *manas, ahaṃkāra* und *mahān ātmā*, p.53.36 (p.40.36))
- (13) その比べるものなき本性をもち、一切であるもの (viśvam) を、造物主シャンブが<sup>31</sup>(呑みこむ)。(彼には) 微細化、浮揚、到達、自在、光、不変がある。(Cf.YBh.3.45, 八種の超能力 (siddhi))
- (14) (それは) あらゆる所に手足の先をもち、あらゆる所に目、頭、口をもち、あらゆる所に耳をもち、世界の中で一切を覆って存在している。(Cf.MBh.VI.35.13, XII.231.29, 291.16, XIII.14.418-419, XIV.19.49, 40.4; Śvet.Upa.3.16; Haas[1922]: p.42, No.805)
- (15) あらゆる生き物たちの心臓であり、手の親指大の者が、際限なく呑みこむのである<sup>32</sup>。それは大きなアートマンであり、一切を支配する者である。(Cf.Hopkins[1902]: God, measured by the size of thumb-joint, p.140.15)
- (16) それから全世界は (sarvam)、不滅不動にして傷なく罪のない、過去現在の人間たちの<sup>33</sup>創造者に入った (samabhavat)。
- (17) このように帰滅について、諸王の王よ、あなたにありのままに語られた<sup>34</sup>。(次に) アートマンに関すること、世界に関すること、神々に関することを聞くべし。

[301 章] (B.313 章, C.11607-11634, K.318 章)

ヤージュナヴァルキヤ仙は言った。

- (1) 真理を見るバラモンたちは、両足は個体に関するもの (adhyātma)、歩行は存在に関するもの (adhibhūta)、ヴィシュヌはその支配神 (adhidaivata) である、と言った。(Cf.Gonda[1954]: *Viṣṇu*, as the divinity presiding over the feet and walking, p.77, fn.8)
- (2) 正しく真理の意味を見る者たちは (yathātattvārthadarśin)、肛門は個体に関するもの、排泄は存在に関するもの、ミトラはその支配神である、と言った。

<sup>28</sup>P.,K.: cārikam B. cādrikam

<sup>29</sup>P.,K.: sarvātma B. bhūtātma Cf. Johnston[1937]: *ahaṃkāra* called *Prajāpati* and *bhūtātman*, p.49.13.

<sup>30</sup>P. ahaṃkāraṃ B.,K.: ahaṃkāro

<sup>31</sup>śambhuḥ prajāpatiḥ Cv. “sahasraśrīṣaṃ devaṃ viśvākṣaṃ viśvaśambhuvam” iti śruteḥ viśvaśambhur nārāyaṇaḥ / (「千の頭をもち、あらゆるところに目をもち、一切に慈悲深い神を」という天啓聖典によって、一切に慈悲深い神 (viśvaśambhu) とは、ナーラーヤナ神である)

<sup>32</sup>P. anuḡrasaty anantaṃ hi B. atha grasaty ananto hi K. anuḡrasaty ananto hi

<sup>33</sup>P. bhūtabhavyamanuṣyāṇāṃ B.,K.: bhūtabhavyabhaviṣyāṇāṃ

<sup>34</sup>P. paribhāṣitaḥ B.,K.: samudāhṛtaḥ

- (3) ヨーガの教義に従って<sup>35</sup>，人々は，性器は個体に関するもの，歡喜は存在に関するもの，プラジャーパティはその支配神である，と言った。(Cf.Gonda[1954]: *Prajāpati*, the presiding deity of the organ of generation, p.77.29)
- (4) サーンキヤの教義に従って<sup>36</sup>，人々は，両手は個体に関するもの，作業は存在に関するもの，インドラはその支配神である，と言った。
- (5) 天啓聖典の教義に従って<sup>37</sup>，人々は，言葉は個体に関するもの，話すことは存在に関するもの，火はその支配神である，と言った。
- (6) 天啓聖典の教義に従って，人々は，目は個体に関するもの，色は存在に関するもの，太陽はその支配神である，と言った。
- (7) 天啓聖典の教義に従って，人々は，耳は個体に関するもの，音声は存在に関するもの，方位はその支配神である，と言った。
- (8) 真理の教説に従って<sup>38</sup>，人々は，舌は個体に関するもの，味は存在に関するもの，水はその支配神である，と言った。
- (9) 天啓聖典の教義に従って，人々は，鼻は個体に関するもの，香は存在に関するもの，地はその支配神である，と言った。
- (10) 真理の認識に通じた者たちは，皮膚は個体に関するもの，接触は存在に関するもの，風はその支配神である，と言った。
- (11) 天啓聖典の教義に従って<sup>39</sup>，人々は，思考器官は個体に関するもの，思考は存在に関するもの，月はその支配神である，と言った。
- (12) 真理の見に従い，人々は，自我意識は個体に関するもの，自惚れは存在に関するもの，有 (bhava) はその支配神である<sup>40</sup>，と言った。
- (13) ヴェーダの教説に従って<sup>41</sup>，人々は，統覚 (buddhi) は個体に関するもの，認識は存在に関するもの，知田者 (kṣetrajña) はその支配神である，と言った。

<sup>35</sup>P. yathāyoganidarśanam B.,K.: yathāyogapradarśinaḥ Cf.Hopkins[Great Epic]: *yogapradarśin*, pp.100.15, 127.12.

<sup>36</sup>P. yathāsāṃkhyanidarśam B.,K.: yathāsāṃkhyānadarśinaḥ Cf.Hopkins[Great Epic]: *saṃkhyānadarśinaḥ* (as in B.,K), pp.100.16, 127.11, 132.11.

<sup>37</sup>P. yathāśrutinidarśanam B.,K.: yathāśrutinidarśinaḥ この表現に関しては，次の第 6，7，9 詩節も同様の異読が見られる。

<sup>38</sup>P. yathātattvanidarśanam B.,K.: yathātattvanidarśanaḥ

<sup>39</sup>P. yathāśrutinidarśanam B.,K.: yathāśāstraviśāradāḥ

<sup>40</sup>P. bhavas tatrādhidaivatam B.,K.: buddhiś cātrādhidaivatam

<sup>41</sup>P. yathāvedanidarśanam B.,K.: yathāvad abhidarśinaḥ

- (14) 王よ、偉大なもの (vibhūtir) がこのようにあなたに、最初、中間、そして終りにおいても明確に<sup>42</sup>、真理に従って述べられた、真理を知る者よ。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Sāṃkhya scheme, p.132.11)
- (15) プラクリティは、気ままに自らの欲望に従って、遊戯のために、もろもろの性質を (guṇān), 百通りにまたそして千通りに多様にするのである (vikurute), 偉大な王よ。(Cf.Hopkins[Great Epic]: *prakṛti*, as a female productive power, p.121.1, fn.1)
- (16) 人々が、一つの灯火から千の灯火を作るように、プラクリティは、人の多くの性質を (puruṣasya guṇān bahūn) 多様にするのである。(Cf.Hopkins[Great Epic]: *prakṛti*, with a simile of a lamp, p.121.2, fn.1)
- (17) 善 (sattvam), 歓喜, 豊富, 喜悅, 名声, 安樂, 清浄さ, 健康, 満足, 信仰,
- (18) 卑しからぬこと, 忿怒なきこと (asaṃrambha), 忍耐, 堅固, 不殺生, 平等, 眞実, 負債なきこと, 柔和, 羞恥, 冷静,
- (19) 清浄, 正直, 品行, 貪欲でないこと, 心の優美さ (hr̥dyasaṃbhrama), 好悪を離れた諸行為を自慢しないこと<sup>43</sup>,
- (20) 布施によって恩恵を施すこと, 望まないものについて他の人を利すること<sup>44</sup>, あらゆる生き物に対する慈悲, これらがサットヴァの諸性質であると伝えられている。(cf.Hopkins[Great Epic]: *sattva*'s eighteen *guṇas*, p.120.1, fn.1)
- (21) ラジャスの諸性質の集団は, 美貌<sup>45</sup>, 支配と争い, 過食<sup>46</sup>, 無慈悲さ, 快苦への耽溺,
- (22) 他者へのもろもろの非難に喜ぶこと, もろもろの論争を好むこと, 自我意識, 冷遇, ためらい, 敵意に耽ること,
- (23) 虐待, 略奪<sup>47</sup>, 無恥, 不正直, 反目 (bheda), 冷淡, 愛欲と怒り<sup>48</sup>, 酩酊, 粗野, 嫌悪, 暴言<sup>49</sup>である。これらがラジャスの諸性質である, とされる。(Cf.Hopkins[Great Epic]: *rajas*'s *guṇa*, p.119.21)
- (24) 次にもろもろのタマスのもの集団を述べるであろう。聞くがよい。(それは) 迷妄, 不明瞭, 暗闇, そして盲闇と呼ばれるものである。

<sup>42</sup>P. vyakatato B.,K.: vyaktito

<sup>43</sup>P. avikatthanam B.,K.: avikatthanā

<sup>44</sup>P. dānena cānugrahaṇam asṛṣṭhārthe parāthātā B.,K.: dānena cātmagrahaṇam asṛṣṭatvaṃ parārthātā

<sup>45</sup>rūpam Ganguli: pride of personal beauty (p.39.42) Deussen: Schöngestalt (p.650, v.21) 中村 [2000]: 美しい容姿 [を誇ること] (p.769, v.21)

<sup>46</sup>P. atyāśitam B.,K.: atyāgitvam

<sup>47</sup>P. 'paharaṇam B.,K.: 'bhiharaṇam

<sup>48</sup>P. kāmakrodhau B. kāmāḥ krodho K. kāmakrodo

<sup>49</sup>P.,B.: 'tivādaś ca K. 'timānaś ca

- (25) 盲闇とは死, 暗闇とは怒りである, とされる。さらに (iha), タマスの諸特徴は, 種々の食事を喜ぶこと,
- (26) 種々の食事に満足しないこと, そして種々の飲物に満足しないことである。香りと衣服に (gandhavāso), もろもろの住いに (vihāreṣu), 寝台に, 座所に,
- (27) 昼間の睡眠に, 争論に<sup>50</sup>, そしてもろもろの放逸に喜ぶこと (rati), 踊り・音楽・歌を (喜ぶこと), 無知のために信じること, 種々のすぐれた教え (dharmaviśeṣānām) に対して嫌悪すること, これらがタマスの諸性質である。

[302 章] (B.314 章, C.11635-11654, K.319 章)

ヤージュナヴァルキヤ仙は言った。

- (1) 第一原因 (pradhāna) のこれら三種の性質 (guṇa) は, 最高の人よ, 常に全世界から離れることなく存在している<sup>51</sup>。
- (2) 百通りに, 千通りに, そして十万通りに<sup>52</sup>, そして千万通りに, これは自らによって個我 (pratyagātman) を創造する<sup>53</sup>。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Hypermetric Śloka, a 句 9 音節, p.255.18)
- (3) 内我を考察する人々 (adhyātmacintakāḥ) は, サットヴァ的なものは上方に位置し, ラジャス的なものは中間に, タマスのなものは下方に位置すると言った。(Cf.BhG.14.18; Hopkins[Great Epic]: creature's place according to the proportion of *guṇa*, p.121.6; Haas[1922]: p.42, No.811)
- (4) 善行のみによって上方の境地に達することができよう。善悪の行為によって人間に, アダルマ (の行為) によっては (api) 下方の境地に (達するであろう)。
- (5) これらサットヴァ, ラジャス, タマスの三種の中の二者の結合, そして (三者の) 混合をについて正しく私から聞くがよい。
- (6) サットヴァにはラジャスが (共存するのが) 見られる。ラジャスにはタマスが, タマスにはサットヴァが見られる。サットヴァには未顕現が見られる。
- (7) 未顕現とサットヴァの結合した者は<sup>54</sup>, 神の世界に達するであろう。ラジャスとサットヴァの結合した者は, 人間たちの中に生まれる。

<sup>50</sup>P.,K.: divāsvapne vivāde ca B. divāsvapne `tivāde

<sup>51</sup>B.,K. はこの後に以下の行を挿入している。(MBh.XII.769\*)

avyaktarūpo bhagavān śatadhā ca sahasradhā / (未顕現の姿をもつ尊者は, 百通りに, また千通りに)

<sup>52</sup>śatadhā sahasradhā caiva Cv. (reading *daśadhā sahasradhā*) daśasahasradhā cety āvṛtyā yojanā / (daśadhā sahasradhā とは, daśasahasradhā, すなわち, 一万通りに, という意味であり, (-dhā) が反復して用いられている)

<sup>53</sup>P.,B.: pratyagātmānam ātmanā K. prakṛtyā `tmānam ātmanā K. は pratyagātman の使用を回避したか。

<sup>54</sup>P. avyaktasattvasamyukto B.,K.: avyaktāḥ sattvasamyukto Ca. (reading *avyaktāḥ sattvasamyukto*) sattvasamyuktaḥ, sattvodrekād utpannātmajñānaḥ / (sattvasamyuktaḥ とは, サットヴァの優勢によって自我の認識の生じた者は, という意味である)



- (8) ラジャスとタマスが結合した者は、動物たちの母胎に生まれる。ラジャスとタマスとサットヴァとが結合した者は<sup>55</sup>、人間に達するであろう。
- (9) 善悪を離れた人々の<sup>56</sup>境地は、永遠不変にして不滅無畏であると<sup>57</sup>人々は言った。  
(Sandhi irregular: *caiva akṣaram* (Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.1.Absence of *savarṇa-sandhi*, 1.1.1.1. -a/ā a/ā-, p.2.11))
- (10) (それは) 賢者たちにとって生じる最高の境地であり、傷なく揺るぐことなく、感官を越え、種子なく<sup>58</sup>、誕生・死・闇を追い払う境地である。
- (11) あなたは、未顕現の中にいる<sup>59</sup>最高者を私に尋ねた、人々の王よ。それはブラクリティの中にいるこの者で、不動 (*tasthu*) と<sup>60</sup>呼ばれる。
- (12) 王よ、このブラクリティの中にいる者は意識なき者と考えられる<sup>61</sup>。これによって支配された者が<sup>62</sup>、(世界を) 創造し、帰滅させるのである。

ジャナカ王は言った。

- (13) この両者は、無始無終にして、偉大な尊者よ<sup>63</sup>、形をもたず、動かず、揺るがず、傷がない<sup>64</sup>。
- (14) 虎のごとき聖仙よ、この知覚されない両者の、どうして一方は知がなく、他方は知があり (*cetanavān*)、そして知田者 (*kṣetrajña*) と呼ばれるのか。(Cf.Hopkins[Great Epic]: *cetanavān*, p.45.4)
- (15) すぐれたバラモンよ、御身は完全に解脱の教義を獲得している (*mokṣadharmam upāsase*<sup>65</sup>)。解脱の教義のすべてを私は正しく聞きたい。

<sup>55</sup>P. *rajastāmasasattvaiś ca yukto* B.,K.: *rājasais tāmasaiḥ sattvair yukto*

<sup>56</sup>P. *manīṣiṇām* B.,K.: *mahātmanām*

<sup>57</sup>P. *caiva akṣaram cābhayaṃ ca yat* B.,K.: *caivam akṣayaṃ cāmṛtaṃ ca tat*

<sup>58</sup>*abijam ca* N. *abijam niravidyaṃ* / (*abijam* とは、無知を離れた、という意味である)

<sup>59</sup>*avyaktasthaṃ* Cn. *avyaktasthaṃ, avyakte 'mūrte brahmaṇi tiṣṭhatī tathā / avyaktadvārā prāpyam ity arthaḥ* / (*avyaktasthaṃ* とは、*avyakte*、すなわち形なきもの、すなわちブラフマンにおいて存在する、ということである。未顕現を通して到達されるべきもの、という意味である)

<sup>60</sup>P. *tasthur ity abhidhīyate* B.,K.: *tastha ity abhidhīyate* Cf.MBh.XII.304.17(*tasthuṣa*); Hopkins[Great Epic]: *tastha*, most likely alluding to the Mait. Upa.6.10, p.44.33.

<sup>61</sup>P. *acetanaś caīṣa mataḥ prakṛtiś ca* B.,K.: *acetanā caiva matā prakṛtiś cāpi* Ca. (gloss: *svaparavivekaśūnyaḥ / etenātmana audāsīnyaṃ darśitam*) *acetanaḥ* / (*acetana* とは、自他の区別を欠いていることで、これによってアートマンの無関心性が示されている) *acetana* なる者が、ブラクリティか、ブラクリティの中にいるとされるアートマンか、によって、テキストの読み違いが生じている。B.,K. の読み、すなわち、意識なきブラクリティがブルシャに支配された時、創造・帰滅を行うという理解の方が、意味は取りやすい。(Cf.Hopkins[Great Epic]: *acetanā prakṛti*, p.118, fn.2)

<sup>62</sup>P. *etenādhiṣṭhitaś caiva* B.,K.: *etenādhiṣṭhita caiva*

<sup>63</sup>P. *mahāmune* B.,K.: *mahāmate*

<sup>64</sup>P. *aprakampau ca nirvraṇau* B.,K.: *aprakampyaḡuṇāḡuṇau* B.,K. の方が読みにくい。N. は *aḡuṇa* を執着などの欠点、*guṇa* を無執着などと解し、全体として「変化しない本性をもつ」と解している。

<sup>65</sup>Cf.Hopkins[Great Epic]: *upāsase*, 韻律規則 (end with diiambbs) が文法規則 (*upāsse*) に優先する例, p.245, fn.1.

- (16) (身体から)分離した靈魂 (dehin) の, 存在性, 唯一性, そして分離性<sup>66</sup>, そしてまた上昇の場所<sup>67</sup>,
- (17) すなわち, 時が過ぎて到達する場所について, 私に語るべし, 再生族よ。そしてサーンキヤの知識を正しく, そしてそれとは別に (prthag) ヨーガを (語るべし)。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Sāṃkhya opposed to Yoga, p.100.24))
- (18) そして御身は, もろもろの予兆についても正しく<sup>68</sup>語るべし, 最善の者よ。御身は, 掌中のアーマラカの実のごとくに, そのすべてを知っているのであるから。

[303 章] (B.315 章, C.11655-11674, K.320 章)

ヤージュナヴァルキヤ仙は言った。

- (1) グナなき者 (nirguṇa) は, 親愛なる者よ, グナある者とする事は<sup>69</sup>できない, 四方の主よ。グナある者とグナなき者<sup>70</sup>とがある。このことを, 正しく私から聞くがよい。
- (2) もろもろのグナを伴うならばグナある者となり, そしてグナをもたなければグナなき者となる, とこのように, 真理を見る偉大な尊者 (muni) たちは言った。
- (3) 未顕現 (m.) は, グナを本性とし, もろもろのグナに近づく<sup>71</sup>。それはこれら (のグナ) を享受する者であり, そして, 本性として無知である。(Cf.Hopkins[Great Epic]: difference between *puruṣa* and *prakṛti*, p.122.20)
- (4) 未顕現 (m.) は認識しない。プルシャは本性として知者であり<sup>72</sup>, 常に「私よりも上位のものは存在しない」と<sup>73</sup>考えている (abhimanyate)。(Cf.Hopkins[Great Epic]: *puruṣa* having a false opinion of himself, p.137.9)
- (5) このために, 未顕現 (n.) は知なきもの (acetanam) となる。そして, (未顕現は) 恒常であり, また不滅であるために, 滅する者たちとは本質的に異なるもの<sup>74</sup>(となる)。

<sup>66</sup>B.,K. はこの ab 句の後に以下の行を挿入している。(MBh.XII.771\*)

daivatāni ca me brūhi dehaṃ yāny āśritāni vai / (身体に依存しているもろもろの神格について私に語るべし。)

<sup>67</sup>P. tathavotkramaṇasthānaṃ dehino 'pi viyujyataḥ B.,K.: tathivotkrāmiṇaḥ sthānaṃ dehino vai vipadyataḥ  
<sup>68</sup>P. ariṣṭāni ca tattvena B.,K.: ariṣṭāni ca tattvāni Cn. (gloss) mṛtyusūcakāni ariṣṭāni / (ariṣṭāni とは, 死を知らせる種々のものである) Cf.MBh.XII.305.8

<sup>69</sup>guṇīkartum Cs. guṇīkartum, guṇavad āpādayitum / (guṇīkartum とは, グナをもつものに変化させることは, という意味である) Cv. guṇabandhājīvaikyam prāpayitum / ((guṇīkartum とは) グナと結びついた個我との同一性に至ることは, という意味である)

<sup>70</sup>aguṇavān Cv. aguṇavān, nārāyaṇaḥ / (aguṇavān とは, ナーラーヤナ神は, という意味である)

<sup>71</sup>P.,K.: guṇān evābhivartate B. guṇān naivātivartate Cs. abhivartate, guṇānusāryeva bhavati / (abhivartate とは, グナに従うかのごとく存在する, という意味である) Cf.Hopkins[Great Epic]: concerning the reading of *ativartate*, p.159.10.

<sup>72</sup>P. puruṣo jñāḥ B.,K.: puruṣo 'jñāḥ Dessen は jñāḥと読むことを示唆している。(Deussen: p.653, v.4)

<sup>73</sup>P. na mattaḥ param astīti B.,K.: na mattaḥ paramo 'stīti

<sup>74</sup>P. kṣarāṇām tattvato 'nyathā B.,K.: kṣaratvān na tad anyathā B.,K. の読みは, 意味をとりにくい。Deussen は, “ oder [Rücksicht auf ihre Entfaltungen] als vergänglich ansehen ” と語を補って訳している。(p.653, v.5)

- (6) (プルシャが) 無知のためにグナの創造を繰り返し行ない<sup>75</sup>, 自分を認識しない時, 未顕現 (n.) とこの世では言われるのである<sup>76</sup>。
- (7) (プルシャは) 諸原理の<sup>77</sup> 創造者でもあるから, 従って (tathā), 原理を性質としてもつ者と<sup>78</sup>言われる。またもろもろの母胎の創造者であるから<sup>79</sup>, 従って, 母胎を性質としてもつ者と<sup>80</sup>言われる。
- (8) (プルシャは) もろもろの物質原因 (prakṛtīnām) の創造者であるから, 従って, 物質原因を性質としてもっている。そしてまた, もろもろの種子の創造者であるから, 従って, 種子を性質としてもつ者と<sup>81</sup>言われる。
- (9) (プルシャは) もろもろのグナを産出するため, 従って産出を性質とする<sup>81</sup>。もろもろの帰滅を引き起こすゆえに, 従ってまた帰滅を性質としてもっている。
- (10) 種子性の故に, 物質原因性の故に, 帰滅性の故に, 無関心の故に, 別異性の故に<sup>82</sup>, (自己) 意識の故に, (プルシャは) 単独者 (kevalam) である,
- (11) と, 清浄にして自己に関する炎の去った苦行者たちは<sup>83</sup>考える。未顕現は, 無常であり恒常である, とこのように我々は聞いた<sup>84</sup>。
- (12) あらゆる生き物に対して慈悲あり, 唯一の知識に立つ人々は, 未顕現の単一性, そしてプルシャの複数性を<sup>85</sup>説いた。(Cf.Hopkins[Great Epic]: plurality of *puruṣa*, Sāṃkhyas, those who have compassion and knowledge, p.123, fn.1)

<sup>75</sup>yadājñānena kurvīta guṇasargaṃ punaḥ punaḥ Cn. ādya yadāśabdo yasmādarthe / yad iti pāṭhe svacchaḥ / (最初の yadā の語は, yasmāt の意味で用いられている。yad という読みの場合は, 意味は明らかである)

<sup>76</sup>P. tadāvyaktam ihocyate B.,K.: tadātmāpi na mucyate

<sup>77</sup>P. tattvānām B.,K.: sargānām

<sup>78</sup>P. tattvadharmī B.,K.: sargadharmā

<sup>79</sup>P. kartṛtvāc caiva yonīnām B.,K.: kartṛtvāc cāpi yogānām

<sup>80</sup>P. yonidharmā B.,K.: yogadharmā Ca.(gloss) yoniḥ devamānuṣatiryagādīḥ / (yoniḥとは, 神・人間・動物などである)

<sup>81</sup>P. tathā prasavadharmavān B.,K.: pralayātāt tathāiva ca B.,K. は, P.9bcd 句と 10a 句が欠落している。このことは, a 句 guṇānām prasavatvāc ca の後, b 句として, P. のように tathā prasavadharmavān と続くべきところを, 同じ tathā で始まる二行下の b 句 (=P.10b) tathā pralayātāt tathāiva ca に視線が行ったというように考えられる。K. はこの後に以下の三行を挿入している。

karṛtvāt pralayānām tu tathā pralayadharmi ca / (P.9cd にほぼ同じ)

karṛtvāt prabhavānām ca tathā prabhavadharmi ca /

bījatvāt prakṛtītvāc ca pralayātāt tathāiva ca / (=P.10ab, B. はこの行を欠いている)

<sup>82</sup>P. upekṣakatvād anyatvād B.,K.: upekṣatvād ananyatvād

<sup>83</sup>P. yatayaḥ śuddhā adhyātavigatajvarāḥ B.,K.: yatayaḥ siddhā adhyātmajñā gatajvarāḥ

<sup>84</sup>P. anityaṃ nityam avyaktam evam etad dhi śūśurma B.,K.: anityaṃ nityam avyaktam vyaktam etad dhi śūśurma

<sup>85</sup>P. nānātvaṃ puruṣas tathā B.,K.: nānātvaṃ puruṣās tathā N. puruṣāḥ ṣaṣṭhyarthe prathamā puruṣāṇām nānātvaṃ ity āhur nirīśvarasāṃkhyāḥ / (puruṣāḥとは, 属格の意味で用いられた主格であり, プルシャたちにとって複数性があると, 無神論サーンキヤたちは言った, という意味である) Cv. (reading *puruṣe*) puruṣe, tattvabandhe jīve nānātvaṃ āhuḥ / (puruṣe とは, 原理と結合した個我において, 複数性 (がある) と書いた, という意味である) Deussen: Die Vielheit [der Entfaltungen] bezeichnen als Einheit, sofern sie ein Unentfaltetes ist, diejenigen Menschen (*puruṣās*), welche von Mitleid für alles Lebende erfüllt sind und .... (p.653, v.11)

- (13) プルシャは、恒常ではないが、恒常と呼ばれている未顕現 (m.) とは異なる。ムンジャ草が茎とは異なるように、そのように (プルシャは) 存在するのである (jāyate)<sup>86</sup>。
- (14) プヨは、イチジクの木とは異なると知るべし。プヨは、イチジクの木とのもろもろの結合によって、そこにおいて汚れることはない。(Cf.MBh.XII.187.38, 240.21cd,22cd, 296.22)
- (15) 魚は、水とは異なると伝えられている。そして水との接触によって魚は全く汚れることはない。(Cf.MBh.XII.187.39, 240.20cd,21ab, 296.22)
- (16) 火は、土鍋とは異なる<sup>87</sup>。常にこのように理解すべし。その火は、土鍋との接触によって汚れることはない。
- (17) (蓮の) 花は、水とは異なると伝えられている。そして蓮の花は水との接触によってそこで汚れることはない<sup>88</sup>。
- (18) これらは常に共住し、そしてまた分離する。平凡な人々は (prākṛtā janāḥ), これをいつもあるがままには見ないのである。
- (19) しかし、他の仕方で見ると人々には正しい見解はなく、彼らが何度も恐ろしい地獄に入るの明らかである。
- (20) このようにサーンキヤの教義はあなたにとって最高の思惟である<sup>89</sup>。サーンキヤに従う人々は、まさにこのように思惟して (parisaṃkhyāya), 独存性に至ったのである。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Sāṃkhya is *parisaṃkhyāna*, p.127.1)
- (21) しかし、他に真理 (tattva) に通じた人々がおり、彼らは、次のように説いている。私は、これから彼らヨーガ行者たちの教義についても<sup>90</sup>語るであろう。

[304 章]<sup>91</sup>(B.316 章, C.11675-11702, K.321 章)

ヤージュナヴァルキヤ仙は言った。

- (1) 私はサーンキヤの知識を語った。ヨーガの知識を、伝承の通りに、経験の通りに、正しく私から聞くがよい、最高の王よ。

<sup>86</sup>K. はこの後に以下の行を挿入している。

na caiva muñjasamyogād iṣikā tatra budhyate / (ムンジャ草との接触からは、そこで茎は認識されない。)

Deussen は、この詩節のムンジャ草の比喩に関して、Kātha Upa.6.17 の参照を指示している。(p.653, v.12)

<sup>87</sup>ukhā Cn.(gloss) mṛtpātraviśeṣaḥ ukhā / (ukhā とは、土器の一種である) Cv. ukhā nāma agner upari sthālyādīsthāpanākṛtamṛmayavedikāviśeṣaḥ / (ukhā とは、火の上で、釜などを固定するために形作られた、土でできた台の一種である)

<sup>88</sup>この詩節に関連して、Deussen は、Chānd.Upa.4.14.3, Mait.Upa.3.2 の参照を指示している。(p.694, v.16)

<sup>89</sup>P. parisaṃkhyātam B.,K.: parisaṃkhyānam

<sup>90</sup>P. yogānām api darśanam B.,K.: yogānām anudarśanam

<sup>91</sup>この章には、Edgerton の英訳がある。(Edgerton[1965]: pp.325-327) また Hopkins は、MBh.229 章, 232 章とともに、この章を叙事詩におけるヨーガについて検討すべき章として挙げている。(Hopkins[Great Epic]: p.182, fn.1)

- (2) サーンキヤに匹敵する知識はなく、ヨーガに匹敵する力はない。この両者は同一の行作をもち (ekacaryau) ,そして両者とも不滅であると<sup>92</sup>伝えられている。(Sandhi irregular: *tu ubhāv* (Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.1. Absence of *savarṇa-sandhi*, 1.1.1.3. -*u/ū u/ū*, p.6.11)) (Cf.Hopkins[Great Epic]: relation between Sāṃkhya and Yoga, p.102.1)
- (3) 小さな知識に喜ぶ人々は<sup>93</sup>, (両者を) 別々に見る。しかし我々は、確信して、(両者は) 同一である、と見る。
- (4) ヨーガを行う人々が見るものは、サーンキヤに従う人々によっても見られる。サーンキヤとヨーガは同一であると見る者は、真実を知る者である。
- (5) 氣息(の制御)を主とする<sup>94</sup>他の (apara) ヨーガ行者たちについて知るべし、敵を苦しめる者よ。彼らはその(ヨーガの)身体によって十方を歩くのである<sup>95</sup>。(Cf.Hopkins[Great Epic]: *rudras* in relation with the group of breaths, p.171, fn.1)
- (6) (彼らは) 帰滅に至るまで、親愛なる者よ、安楽を放棄して、八種の要素からなる<sup>96</sup>微細なヨーガ(の身体)によって、もろもろの世界を歩きまわるのである (vicaran) ,罪なき者よ。(Cf.Hopkins[1901]: p.341.3; Hopkins[Great Epic]: characteristics of the subtle body of the Yogin, p.173.26)
- (7) 賢者たちは、もろもろのヴェーダにおいて、ヨーガは八種の要素をもつと<sup>97</sup>言っ

<sup>92</sup>P. *tu ubhāv anidhanau* B.,K.: *tāv ubhāv anidhanau* Cn. *anidhanau, mṛtyunāśakau* / (anidhanau とは、両者は死を滅するものである、という意味である) Cp. *nidhanasya, mṛtyurūpasamśārya, nivartakau* / ((anidhanau とは) *nidhanasya*, すなわち、死の姿をした輪廻を、滅するものである両者は、という意味である)

<sup>93</sup>P. *ye 'lpabuddhiratā narāḥ* B.,K.: *ye 'py abuddhiratā narāḥ*

<sup>94</sup>*rudrapradhānān* Cn. *utkramaṇakāle dehinam rodayantīti rudrāḥ prāṇā indriyāṇi ca / tāny eva pradhānabhūtāny ālambāni yeṣu tāt* / (死に際して靈魂を悲しむから *rudrāḥ*と言われる。それはすなわち、もろもろの氣息であり、もろもろの感官である。それらが、主となっている、すなわち(感官を)もろもろの基盤とする者たちを、という意味である。) Cs. *rudrā ekādaśendriyāṇi tatpradhānān, pratyāhāraparān* / (*rudrāḥ*とは、十一種の感官であり、*tatpradhānān*とは、すなわち、抑制を専らとするものたちを、という意味である) Cv. *rudrāḥ pradhānaḥ prathamopadeṣṭā yeṣām* / (*rudrāḥ* ルドラが、*pradhāna*, すなわち、第一の師匠である、とする者たちにとっては、という意味である) Hopkins は、N. の注釈によって、*rudrapradhānān* を 'having breaths and elements' と解し、この詩節を次のように英訳している。

"Learn now the special Yoga-practices depending on the breaths." (Hopkins[1901]: p.340.23-24)

<sup>95</sup>Hopkins は、ヨーガ行者とその実践について、この詩節から第 14 詩節 ab 句に言及し、この間の詩節一つ一つに英訳とコメントを付している。(Hopkins[1901]: pp.340.1-343.4) また、Edgerton は、この詩節に関して、MBh.XII.289.26-30 の参照を指示している。(Edgerton[1965]: p.325, fn.2)

<sup>96</sup>*aṣṭaguṇena* Cn. *aṣṭaguṇena, puryaṣṭakamayena sūkṣmaśarīreṇa* / (*aṣṭaguṇena* とは、八種の構成要素からなる微細な身体によって、という意味である) Cs. *aṣṭaguṇena, bhūmisaliladahanapavanagaganamanobudhy(sic)ahaṃkāraih sūkṣmāṣṭakaniyuktenety arthaḥ* / (*aṣṭaguṇena* とは、地・水・火・風・虚空 (gagana)・思考器官・統覚・自我意識という八種の微細なものと結びつくことによって、という意味である) この *aṣṭaguṇa* の語に関して、Edgerton は、八種の *siddhi* (supernatural power) が、*yama, niyama* などの八種のヨーガ支分であろう、と推測している。(Edgerton[1965]: p.324, fn.3)

<sup>97</sup>P. *vedeṣu cāṣṭaguṇitaṃ* B. *vedeṣu cāṣṭaguṇinaṃ* K. *tāvad evāṣṭaguṇinaṃ* Cp. (gloss) *yamaniyamāsana-prāṇāyāmapratyāhāradhyānadhāraṇāsāmādhirūpam* / (勤戒・禁戒・座法・氣息の制御・抑制・禪定・凝念・三昧を姿とする) Cs. *aṣṭaguṇam aṇimāṣṭaguṇaiśvāryayuktam* / (*aṣṭaguṇam* とは、極小化(など)の八種の性質と自在性とが結びついたものである) Ca. (*aṣṭaguṇikaṃ*) (gloss) *ayaṃ ca karmajñānapravaṇatvād yogabhedā eva, loke tu na tathā prasiddhiḥ* / (行為と知識が衰退したために、このヨーガの分化がある。しかし世間ではそのように知られていない)

た。微細な八種 (のヨーガ) は、それとは別のものではないと言われる、最高の人よ。  
(Cf.Hopkins[1901]: p.341.11; Hopkins[Great Epic]: eightfold *yoga*, p.44.24)

- (8) ヨーガ行者たちにとって、二種の最高のヨーガの行法が説かれた。(それは) 聖典の教示に従えば、(外的) 特徴をもつものともたないものである<sup>98</sup>。
- (9) (それらは) 心 (*manas*) の保持<sup>99</sup>と呼吸の制御とである、王よ<sup>100</sup>。呼吸の制御は (外的) 特徴をもち<sup>101</sup>、心の保持はもたない。
- (10) もろもろの氣息を放出しているのが見られるところでは<sup>102</sup>、ミティラーのすぐれた王よ、風の増大が生じる。それ故、(そこでは呼吸の制御を) 行うべきではない。
- (11) 夜の上半 (最初の三時間) における指示<sup>103</sup>は十二種伝えられている。中間において眠った後、下半 (最後の三時間) では指示は十二種である。(Cf.MBh.XII.294.11; Hopkins[1901]: p.342.23; Edgerton[1965]: no list of *codanā*, p.309, fn.1)
- (12) このようにして、ヨーガによって、アートマンは、静まり、調御し、孤独を好み、自己に満足して、目覚めた者となるであろう。この点に疑いはない。(Cf.Hopkins[1901]: p.342.30)
- (13) 五種の感官の、音声、接触、色、味、香りという五通りの障害を捨て去り (cf.Hopkins[1901]: p.342.32; Hopkins[Great Epic]: five faults of a Yogin, p.181.4)
- (14) (感官の) 奔放と怠惰を抑えて<sup>104</sup>、ミティラーの王よ、感官の集合をすべて思考器官 (*manas* 心) に帰入せしめて、(cf.Hopkins[1901]: p.342.34)
- (15) 同様に、思考器官を自我意識 (*ahaṃkāra*) の中に留まらしめ、人々の王よ、そして同様に、自我意識を統覚 (*buddhi* 意識) の中に、統覚を根本原質 (*prakṛti*) の中に (留まらしめ)、(cf.Hopkins[1901]: p.342.36)

<sup>98</sup>saguṇaṃ nirguṇaṃ caiva N. saguṇaṃ sabījaṃ nirguṇaṃ nirbījaṃ / (saguṇaṃ とは、種子をもつものであり、nirguṇaṃ とは、種子のないものである) Hopkins[1901]: being either with or without characteristics (p.341.23) Edgerton[1965]: qualified (exoteric) and unqualified (esoteric) (p.325, fn.4)

<sup>99</sup>P. dhāraṇā B.,K.: dhāraṇaṃ

<sup>100</sup>B. はこの後に次の行を挿入している。

ekāgratā ca manasaḥ prāṇāyāmas tathaiva ca / (心の一点への集中と氣息の制御である。)

<sup>101</sup>saguṇo Ca. prakāṭataravāyunirodhatvāt saguṇaḥ / ((呼吸の制御は) より明白な風の停止の故に、saguṇaḥ である)

<sup>102</sup>P. yatra dṛśyeta muñcan vai prāṇān B.,K.: yady adṛśyati muñcan vai prāṇān Cn. (reading *yady adṛśyati*) adṛśyati, adṛśyamāne mocanasthāne yady vāyuṃ muñcan bhavati / (adṛśyati とは、(氣息を) 放出する場所で (神格が?) 観想されていない場合に、もし風を放出するならば、という意味である) Hopkins[1901]: If one expels the breaths when no visible object is at hand there results merely an excess of wind; hence one should not begin the practice in this way. (p.342.11-13)

<sup>103</sup>codanā Ca. codanāḥ vāyor manaso vā aniyate deśe prerāṇaḥ / (codanāḥ とは、氣息、あるいは、心の場所が定まっていない時における示唆である) Cv. codanāḥ yogābhyāsāḥ, dvādaśadvādaśaḥaṭīkāparyantāḥ / (codanāḥ とは、ヨーガのもろもろの修習であり、十二回の十二ガティカー (時間の単位) で終わるものである)

<sup>104</sup>pratibhām apavargaṃ ca pratisamhṛtya Cn. pratibhāṃ, vikṣepam / apavargaṃ, layam / (pratibhām とは、すなわち、散乱を、apavargaṃ とは、すなわち、消失を、という意味である) Cf.Hopkins[1901]: *pratibhā*, distaction of mind (p.343.15); Hopkins[Great Epic]: *pratibhā* and *apavargya* in relation to the exercise for a “limited time”, p.107, fn.1

- (16) このように思弁して<sup>105</sup> , それから唯一にして , 汚れを離れ , 力あり<sup>106</sup> , 永遠無限にして清浄であり , 欠陥なく , (cf.Hopkins[1901]: p.343.1)
- (17) 動くことのない , 善にして分割不能な不老不死のプルシャを<sup>107</sup> , そして永遠不滅の支配者 , すなわち不滅のブラフマンを , 瞑想すべし。 (Sandhi irregular: *caiva īśānaṃ* (Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of *praśliṣṭa-sandhi*, 1.1.2.1. *-a/ā i/=i*, p.7.2)) (Cf.Hopkins[1901]: p.343.2; Hopkins[Great Epic]: *yogin's meditation on the eternal Lord-Spirit and Brahman*, p.107.25)
- (18) 偉大な王よ , ヨーガに専心する者の (*yuktasya*) もろもろの特徴を聞くべし。 (彼の) 寂静の特徴は , 満足した者が安楽に眠るがごとくである。
- (19) 賢者たちは , ヨーガに専心する者のことを , 風のない場所で , 油に満たされた灯火が , 揺らぐことなく先端を真上にして輝くかのようである , と語った。 (Cf.Hopkins[1901]: p.343.6-8; Hopkins[Great Epic]: *simile of lamp*, p.109, fn.2)
- (20) ヨーガに専心する者の特徴は , 雲より生じた雨粒たちに打たれても , 揺るがすことができない石のようである。
- (21) 法螺貝や太鼓の轟音によっても , さまざまな歌や楽器 (の轟音) が発せられても , 動揺しないであろう , とヨーガに専念する者について<sup>108</sup>描写されている。
- (22) 人 (*pūruṣa*) は , 油が一杯に満ちた器を両手で持って , 刀を手にした者たちによって脅され , 恐れて階段を登るならば ,
- (23) 自分を抑えて , 彼らに対する恐怖のために器から一滴もこぼすことはないであろう (cf.MBh.XII.289.32)。心を一点に集中して川を渡る者にとっても (?)<sup>109</sup>同様である。 (Sandhi irregular: *uttaramānasya ekāgramanasa* (Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of *praśliṣṭa-sandhi*, 1.1.2.4. *-a/ā e-*, p.12.12)
- (24) もろもろの感官は静まっており , そして不動であるから。ヨーガに専心する尊者のもろもろの特徴をこのように理解すべし<sup>110</sup>。

<sup>105</sup>*parisaṃkhyāya* Cn. *parisaṃkhyāya, pravilāpya* / (*parisaṃkhyāya* とは , 帰滅せしめ , という意味である) Cs. *cintayitvā* / (考えて , という意味である) Cf.Hopkins[Great Epic]: *parisaṃkhyāya*, p.127.6)

<sup>106</sup>*virajaskam alam* Ca. *alam, samartham* / (*alam* とは , 能力ある , という意味である)

<sup>107</sup>P. *tasthuṣaṃ puruṣaṃ sattvam abhedyam ajarāmaram* B.,K.: *tasthuṣaṃ puruṣaṃ nityam abhedyam ajarāmaram* Ca. *tasthuṣaṃ iti chāndasam, sthitimātradharmam* / (*tasthuṣaṃ* とは , ヴェーダ語形で , 立つことのみを性質とする , という意味である) Cn. *tasthuṣaṃ, sthāṇuṃ kūṭastham ity arthaḥ* / (*tasthuṣaṃ* とは , 柱 , 不動という意味である) Cs. *puruṣaṃ, pūrṇam / sattvaṃ jñānānandarūpam* / (*puruṣaṃ* とは , 遍満している , という意味であり , *sattva* とは , 知と歡喜を姿とする者である) Cf.Hopkins[Great Epic]: *tasthuṣaṃ puruṣaṃ*, gross violations of grammar, p.262.26 Edgerton[1965]: *sattvam*, purity (p.326, v.17) or goodness (p.326, fn.4)

<sup>108</sup>P.,K.: *yuktasya* B. *muktasya*

<sup>109</sup>P. *tathavottaramānasya ekāgramanasa* B.,K.: *tathavottaram āgamyā* Edgerton[1965]: and so he climbs with concentrated mind (p.327, v.23)

<sup>110</sup>P. *upadhārayet* B.,K.: *upalakṣayet*

- (25) ヨーガに専心する者は<sup>111</sup>，最高にして揺るがぬ，大きな暗闇の中に立つ灯火のごときブラフマンを見るのである。
- (26) 長い時間の後，(ヨーガに専心する者は) これによって身体を捨てて，見た者のいない<sup>112</sup>唯一性に至る。これが永遠なる天啓聖典(śruti)(の教え)である。
- (27) 以上がヨーガ行者たちにとってのヨーガである(etad hi yogaṃ yogānām)。他にヨーガの特徴があろうか。賢者たちは，このことを認識して，為すべきことは為したと考えるのである。(Cf.MBh.XII.294.25; Hopkins[Great Epic]: *yogam* as a neuter noun, p.102.11)

[305 章] (B.317 章, C.11703-11723, K.322 章)

ヤージュナヴァルキヤ仙は言った。

- (1) 今や，(死後の靈魂の) 離脱について注意して聞くべし，王よ。両足より離脱する者は<sup>113</sup>，ヴィシュヌ神の世界に<sup>114</sup>(達する)と言われる。(Cf.Hopkins[1901]: p.346.22; Hopkins[Great Epic]: the fate of the soul depending on the part of the body it burst through, p.186.24)
- (2) 両脛より(離脱する者)はヴァス神群に達する，と我々に伝えられている。両膝より(離脱する者)は大幸運の神サーディヤ神群に<sup>115</sup>達するであろう。
- (3) 肛門より離脱する者はミトラ神の世界に<sup>116</sup>達するであろう。腰を通過して(離脱する者は)，地神(の世界)に，両腿を通過して(離脱する者は)，ブラジャーパティ(の世界)に<sup>117</sup>(達するであろう)。
- (4) 両脇腹から(離脱した者)はマルト神群(の世界)に，両鼻孔からは月(の世界)に<sup>118</sup>，

<sup>111</sup>P. sa yuktaḥ paśyati B.,K.: svayuktaḥ paśyate

<sup>112</sup>etena kevalaṃ yāti tyaktvā deham asākṣikam / Cs. asākṣikam, sāksyantarābhāvāt / (他の証人がいないために，asākṣikam である) asākṣikam が形容するのは，kevalam か deham である。Ganguli, Deussen とも直前の deham にかけて，それぞれ ‘after casting off this inanimate body’ (p.45.35), ‘nach Verlassen des unbeseelten Körpers’ (p.657, v.26) と訳している。Edgerton[1965]: he goes to the Absolute, which has no witness (p.327, v.26)

<sup>113</sup>padbhyām utkramamāṇasya Cv. padbhyām utkramamāṇasya, pādatalābhyām jīvakalām ūrdhvaṃ nayataḥ / jīvasya dehād ūrdhvaṃ gamanaṃ tu brahmanāḍīmukhenaiveti jñātavyam / (padbhyām utkramamāṇasya とは，両足の裏から靈魂の部分を上方に導く者にとっては，という意味である。靈魂が身体より上方へ進むのは，ブラフマー神の臍に向かうために，と知るべし)

<sup>114</sup>vaiṣṇavaṃ sthānam Cs. vaiṣṇavaṃ, pādāyor abhimānī viṣṇur ādityaviśeṣas tasya lokam ity arthaḥ / (両足の自慢者(?)であるヴィシュヌは，特別な太陽神である。vaiṣṇavam とは，彼の世界に，という意味である)

<sup>115</sup>P. mahābhāgān devān sādhyān B.,K.: mahābhāgān sādhyān devān

<sup>116</sup>maitraṃ sthānam Cs. maitraṃ sthānaṃ, prāṇavṛtter ahnaś cābhimānī devatātmā mitras tadyaṃ sthānam ity arthaḥ / (ミトラは，神格を本性としてもち，生命活動の日であると(自分を)考える者である(?))。maitraṃ sthānam とは，そのような(ミトラの)世界に，という意味である)

<sup>117</sup>prajāpatim Cs. prajāpatayaś ca dattaprabhūtayāḥ / (ブラジャーパティたちとは，権威を与えられた者たちである)

<sup>118</sup>P.,K.: nāsābhyām indum eva ca B. nābhyām indratvam eva ca Ganguli: and if through the nostrils, to the region of Chandramas. (p.46.10)



両腕からはインドラ神 (の世界) に、胸を通過して (離脱した者) はルドラ神 (の世界) に (達する) と言われている。

- (5) 首から (離脱した靈魂) は、かの<sup>119</sup> 最高の聖仙であるこの上なきナラ (の世界) に達する。口を通過して (離脱した者) はヴィシュヴァデーヴァ神たち (の世界に)(*viśvedevān*)、耳を通過して (離脱した者) は方位神たち (の世界) に達するであろう。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Dialectic Sanskrit, *viśvedevān*, p.265.14)
- (6) 鼻を通過して (離脱した者) は香を運ぶもの (=風) に、両目からは太陽に<sup>120</sup>、両眉からはアシュヴィン双神 (の世界) に、額を通過して (離脱した者) は祖靈 (の世界) に (達するのである)。
- (7) 頭頂を通過しては、遍在し神々の最初に生まれたブラフマン (の世界) に至る。以上もろもろの離脱 (した靈魂) の世界が述べられた、ミティラーの主よ<sup>121</sup>。
- (8) さてこれから、賢者たちによって定められた、一年以内に死ぬ個我 (*śarīrin* 靈魂) に生じるであろう<sup>122</sup>もろもろの予兆について述べるであろう。(Cf.MBh.XII.302.18; Hopkins[Great Epic]: signs of death, p.100, fn.3)
- (9) 以前は見えた大熊座の小星 *Arundhatī* を、そして北極星をもはや見る事ができない者、そして満月も灯火も、右側が欠けた姿として見る者<sup>123</sup>、彼らは一年の寿命であると言われる。
- (10) 他人の眼の中に、自分の影によって作られた自分を見ることのできない者たち、王よ、彼らも寿命は一年である。
- (11) 大きな輝きをもち、大きな英知をもつ者が、英知がなく輝きがなくなるというように、本来の姿が変化することは (*prakṛter vikriyāpattiḥ*)、六ヶ月以内の死の特徴である。(Sandhi irregular: *atiprajñā aprajñā* (Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.1 Absence of *savarṇa-sandhi*, 1.1.1.1 *a/ā a/ā*, p.2.11)
- (12) 神々を蔑視する者、バラモンたちと対立する者、黒ずんだ土気色の皮膚の色をもつ者は (?)<sup>124</sup>、六ヶ月以内の死の特徴である。

<sup>119</sup>P. grīvayās tam B.,K.: grīvayā tu

<sup>120</sup>P.,K.: sūryam eva ca B. agnim eva ca

<sup>121</sup>Deussen は、MBh.XII.286.27(C.10927) の参照を指示している。(p.658, v.7)

<sup>122</sup>P. *saṃvatsaraviyogasya saṃbhavyeṣṭ śarīriṇaḥ* B. *saṃvatsaraviyogasya saṃbhavanti śarīriṇaḥ* K. *saṃvatsarād vimokṣas tu saṃbhaveta śarīriṇaḥ* /

<sup>123</sup>*khaṇḍābhāsam dakṣiṇatas* Cv. *dakṣiṇataḥ dakṣiṇākṣiṇe* / (*dakṣiṇataḥ* とは、右目の隅に、という意味である) Deussen: oder wer den Vollmond nur als Flamme und teilweise von rechts her scheinen sieht(p.658, vv.9-10).

<sup>124</sup>*kṛṣṇaśyāvachavichāyaḥ* Ganguli: who, being naturally of a dark complexion becomes pale of hue. (p.46.33) Deussen: bei wem die dunkle Gesichtsfarbe einen fahlen Schein annimmt, (p.659, v.13) 中村 [2000]: 皮膚の色の黒色が褐色になること (p.780, v.13)

- (13) 破損した車軸のように<sup>125</sup>、月を壊れた<sup>126</sup>円盤と見る者、そして太陽をそのように見る者は、七夜のうちに死を迎えるのである。(Cf.Hopkins[1903]: *saptarātreṣu mṛtyubhāk*, p.18.9)
- (14) 神殿にいて、よい香りを得ても、(それに)死体の臭いを嗅ぐ者は、六夜のうちに<sup>127</sup>死を迎える。
- (15) 耳と鼻の屈曲、齒と眼の色褪せ、意識の消滅、体熱なきことは、その日のうちの死を示すもの (*nidarśana*) である。
- (16) 理由なく左の眼が涙を流すならば、人々の王よ、そして頭から湯気 (*dhūma*) が昇ることがあれば、(それらは) その日のうちの死を示すものである。
- (17) 以上のようなもろもろの予兆を認識して、人は、思慮深く<sup>128</sup>、夜にまた昼に、自らを最高のアートマンに結びつけるべし、
- (18) 必ず来るであろうその時を<sup>129</sup>待ちつつ。あるいは、この者が死を望まないならば、この(次節の)行為を確立することを願うべきである。
- (19) (心を)集中して、あらゆる香りともろもろの味を保持すべし<sup>130</sup>。そして、それ(集中)に専念する内的アートマンによって死に勝つべし<sup>131</sup>。
- (20) サーンキヤ(の知識)を伴う(心の)保持を<sup>132</sup>知って、雄牛のごとき人よ<sup>133</sup>、ヨーガによって、(そして)それに専念する内的アートマンによって、死に勝つべし。
- (21) (その者は)完全な不滅に達して、再生のない吉祥にして不変の境地、未熟な者たちによっては到達しがたい永遠不動の境地に至るであろう。

<sup>125</sup>P. *śīrṇanābhi* B. *ūrṇanābher* K. *śīrṇanābhiṃ*

<sup>126</sup>*chidraṃ* Cn. *chidraṃ, chidravantam* / (*chidraṃ* とは、穴をもつものと(見る)、という意味である)

<sup>127</sup>P. *ṣaḍrātreṇa* B.,K.: *saptarātreṇa*

<sup>128</sup>*ātmavān* Cs. *ātmavān, manasvī* / (*ātmavān* とは、賢明に、という意味である)

<sup>129</sup>P. *tat kālāṃ yat kālāṃ prati tad bhavet* B. *tat kālāṃ yat kālāṃ pretatā bhavet* K. *tat kālāṃ yaḥ kālāḥ prakṛto bhavet*

<sup>130</sup>P. (*sarvagandhān rasāṃś caiva*) *dhārayeta samāhitaḥ* B. *dhārayīta narādhipa* K. *dhārayīta samāhitaḥ* (K. は、P. と B. を折衷した形になっている) Cp. *gandhatanmātrarasatanmātradhāraṇāyāṃ śarīraṃ na nīrasatām āpadyate* / (香唯・味唯が保持される時には、身体は乾燥状態 (*nīrasatā*) に至らないのである) Cs. *dhārayet, indriyadvārā manasy upasamharet* / (*dhārayet* とは、感官を通して心に集中すべし、という意味である)

<sup>131</sup>P. *thathā hi mṛtyuṃ jayati tatpareṇāntarātmanā* K. *tathā mṛtyuṃ upādāya tatpareṇāntarātmanā* B. にはこの P.19cd, K.20ab にあたる句はない。K. はこの句に引用符をつけており、この句は後の付加であることを示唆している。

<sup>132</sup>P.,B.: *sasāṃkhyadhāraṇaṃ* K. *sa sāṃkhyadhāraṇaṃ* Cs. *sasāṃkhyadhāraṇaṃ, jīvabrahmaṇor ekatva-jñānaṃ sāṃkhyam, tena sahitaṃ dhāraṇaṃ paramātmacintanam* / (*sasāṃkhyadhāraṇaṃ* に関して、*sāṃkhyam* とは、個我とブラフマンの同一性の知識である。それを伴う *dhāraṇam*, すなわち、最高我の考察を、という意味である)

<sup>133</sup>P.,K.: *viditvā manujaṣabha* B. *viditātmā naraṣabha*

(2015年12月22日 受付)

(2016年 3月 9日 受理)